

あしひき 繪卷

梅津次郎

「あしひき」は所謂稚兒物語の一で、叡山の僧侍從君玄怡がふとした折に白河の邊にて奈良の民部得業の若君を垣間見てよりの兩者の愛戀を中心とし、その離別と邂逅の曲折より、遂ひに兩人が高野に於て成道入滅するに至る迄を描けるもので、その間若君の繼母の陰謀、山門と奈良の大衆との争鬪等を織込み、此種物語中の大作として知られる。(註一)その構想は室町時代初期の所産とせられる秋の夜の長物語と一脈相通する所があり、共に佛家の立場よりかゝる愛慾を讚美する如き色彩が濃厚であるが、「あしひき」に於ては戀愛物語はむしろ從で、如何にして成道するかを説いたものと見る説もある程に佛敎思想の反映が著しく、之が佛家の作に成ることは疑ひない。ところが、他の殆どすべての稚兒物語がそうであるやうに、この「あしひき」も亦叡山の僧を中心とするものであつて、就中、後述する如くその繪卷が叡山に於て作られてゐる點は、他の稚兒物語考察に際してもかなり重要な示唆を與へるものと云ふべきであらう。

物語としての「あしひき」は夙に藤井紫影博士の藏本が室町時代小

あしひき 繪卷

説集平出鑑二
郎氏編に収録され、周知のところであるが、繪卷としては看聞御記等によつてその製作を知られつゝも、その傳存は去る昭和十一年十一月田村家の賣立に現れる迄は公には知られなかつた。此繪卷は後、池永孟氏の所藏に移り、現在は小林一三氏の藏有に歸してゐる。今回同家の好意により之が調査を遂げ得たのを機とし、關聯する多少の記述を試みる。

この繪卷の出現に我々は特別の興味を寄せたのであつたが、それは、云ふ迄もなく、看聞御記永享八年より同十年に互る「足引繪」の製作に關する稀有の詳細なる記録に關聯してゐつた。(註三)

永享八年六月廿五日の條に

抑山門足引繪一合五卷續
手首定直持參自山門以事書申第四卷一局之詞可被染御筆之由載事書所望申定直有所緣執申件繪新寫栗出口氏
筆也甚殊勝也詞妙法院堯仁法親王室町殿一段
被遊清水谷等能書共筆跡也銘舊院御筆也後小松院貴所之御筆大切之間望中云々第四卷有詞雖然非指筆跡之間望申云々雖斟酌千萬先預置此繪初一見了

とあるにその記録は始まるが、之によつて當時山門に於て五卷の足引繪の製作が一應完成して居たのであつたが、改めて其第四卷の詞書執筆を後花園天皇に奏請した事情が判明する。而してその詞書執筆として擧げられてゐる三人のうち、室町殿とは時代の關係よりして足利義持なるべく、清水谷とは恐らく實秋を指すものと考へられる。更に繪の作家として記録せられる栗田口民部は即ち繪所の法眼隆光であつて、後述する如く應永永享間に活躍せる人と知られる。茲に此繪卷關係者五人のうち清水谷實秋は最も早く應永二十七年に薨じてゐるから、尠くとも此繪卷は同年以前に成立せることが知られるのである。しかるに偶然か否か、以上五人の人々はいづれも、粗々應永廿一年頃に成つたと考へられる嵯峨清涼寺所藏の融通念佛緣起繪卷をも夫々分擔してゐる。

却説この足引繪卷は第四卷に後花園天皇の御染筆を忝うして永享九年二月廿五日山門に返つたのであるが、同三十日山門使節佛眼院宗圓律師が御禮に參上、賀札を捧呈してゐる。それによると此繪卷は山門西谷圓城院の所藏であつたらしい。

しかるに永享十年五月廿六日より廿八日の條に及ぶと、後花園天皇は宸筆を以て件の足引繪を寫し置き給ふたのであつたが、此度彩色のため再びかの繪卷を山門より召寄せられたことが知られ、看聞御記を點檢するに、各卷の詞書執筆は左の人々であることが判る。

第一卷 宸筆(後花園天皇)

第二卷 後崇光院

第三卷 行豊朝臣

第四卷 公知朝臣(中書侍
經朝臣)

第五卷 宸筆(後花園天皇)

而して、彩色は何人が擔當したかは詳かでないが、第二卷は藏人次益父なる民部少輔以盛なる者が之を行ひ、繪所の能筆の名に恥ぢざる出來榮であつたのである(永享十年
七月廿二日)。

かくて、看聞御記の記載によつて、我々は文献上こゝに少くとも二本の足引繪が製作されたことを知り、併せてその筆者をも明かにし得た。

但しあしひき繪に關する記録は之に止らない。御湯殿の上の日記文明十六年十二月九日の條には「(前略)山よりあしひきのゑけさんにいる」とあり、之は件の繪卷かと思はれるが、更に後奈良天皇の御記天聽集天文四年四月三日癸巳の條には「(前略)武家へ葦曳繪五卷借之」の記録が見える。之は或ひは御系統の關係より後花園天皇御親寫の本であつたのではないかと考へられる。

かく考察し來る時、文献上の「あしひき」繪は、凡そ隆光筆本系統に歸一すると推定せられるのであつて、茲に隆光筆本を以てあしひき繪の原本と見做し得る可能性が甚だ濃くなつてくる。之をこの物語成立に就いて國文學者の側の見解を聽くに概ね看聞御記の記事を引いて之を室町初期の作であらうとなしてゐるのであつて、物語と繪卷との同時的成立が考へられ、愈々隆光筆本が原本たる確實性を増すことになる。

斯本は全五卷^(註四)、詞書世尊寺定成卿、繪飛驒守惟久の傳稱がある。今此の筆跡を同じく定成と傳へられる知恩院藏法然四十八卷傳の第十九、二十の詞書と比較するに、様式的な類似以上に之を同筆と認めることは難いが、斯本全五卷が一筆に成ることは否定し得ないのであつて、此點よりして、斯本が看聞御記に見る二本の足引繪の何れにも該當せしめ得ないものであることは明瞭となる。

繪は一紙の長さ甚だ不揃なる極めて薄き料紙を用ひたもので、一見して之が敷寫であることを容易に推定せしめる。謄寫の態度は比較的慎密であつて、少くとも之が直接の原本となつたもの、俛は或程度傳へ得て居るものと信じて差支ないであらう。謄寫本の性質上、特にその構圖的側面に於て、然か信せられるが、個々の描寫に至つては畫家の筆力の薄弱を覆ふべくもない。又首卷と結卷の間には筆致に相當の相違が窺はれるのであるが、第一、二卷は殊に原本に忠實ならんことを期せるもの、如く、それだけに又古様を味はせるものがあるが、個々の形態、殊に樹木、土坡に於ては一線を寫すに數筆を重ねる筆技の覺束なさは隨所に充ちてゐる。従つて結卷に窺はれるや、粗獷の筆致に成るものを異筆と見做すか、或ひは同一筆者の地金の露はれと見るかは觀者によつて所見を異にするであらうと思はれる。尙外に數段の後補と認められる繪をも存するが、それはともあれ、之を以て所傳の如く惟久の筆となすことは、こゝに池田家の後三年合戰繪卷を引合に出す迄もなく否定せらるべきである。たゞその製作年代に至つては、之が前述の如き特殊なる傳摸である爲め、その推定は困難であるが、

こゝに至つて小林家本と上記文献上に見る足引繪との關係が問題となる。

之が看聞御記の二本以後に成るものであることは疑問の餘地がなく、又斯本が御記にしろす隆光筆本と同系であることも亦認めて恐らく誤りはないであらう。尙先に記し残したが、斯本各巻の題簽に「葦曳繪」とあることは、既記天聽集の「葦曳繪」の文字と照し合せるならば、或ひはこれ彼此の系統的關係を暗示するものであるかも知れぬ。

隆光の畫跡として現存するものには既記の融通念佛緣起繪卷の上巻第三段及び下巻清涼寺大念佛の段がある。之は僅かに二段に過ぎず、又小林家本あしひき繪が原本の第何傳に當るかは明かでなく、彼此比較して論ずるも餘り當らないが多少相通する點なきにしもあらず、寧ろかの緣起繪全體と比較して、その構圖描寫を考へるならば、我々は失はれた隆光本あしひき繪を髣髴し得るに庶幾いのであるまいか。(註六)

隆光の傳は未だ餘り明かにされてゐない。前記融通念佛緣起には「繪所栗田口民部法眼隆光(花押)」の署名があり、看聞御記には、永享九年八月十三日の條に吉祥天女繪綵色の事が見え、又同十年五月十六日の條以下には、おそく、つの源氏繪二巻を作つたことが見えて、後崇光院は之を「殊勝也」と稱せられたのであつた。かくの如くその作域は相當に弘く、當代の能畫であつたのである。

即ち、我々は失はれた隆光筆本「あしひき繪」の姿をこゝに見出すことに小林家本の價値を認めるものであるが、尙斯本について附記して置かなければならぬ重要な事項は、之が詞書に於て完本なることであつて、前記藤井博士藏本の缺を補ひ得ることである。(註七)

(註一)「あしひき」の名の由來は、侍従が若君の袖をひかへて語らひよれる時、「いづこの人なればかくはしれかましくなといへばあしひきのとこそ申たう侍に誠や御袖をはなしかは引侍らんと聞ゆれば」云々とあるに出づるもので、「あしひき」即ち山の枕言葉を以て山門にかけたものである。

(註二) 日本文學大辭典「あしひき」の條參照。

(註三) 看聞御記の足引繪關係の記事は日本美術協會報告第四十三輯に久保田米所氏の抜萃がある。

(註四) 第一卷詞繪各七段(本紙總長一三〇・四・五種)

第二卷同 各六段(同 一三五・七・九種)

第三卷同 各六段(同 一四四・四・六種)

第四卷同 各四段(同 一二四・四・二種)

第五卷同 各七段(同 一五九・九・三種)

高サ各卷二十九種

(註五) 斯本は内宮黒漆塗、外宮溜塗その蓋表に「あしひきの繪 五卷」と金泥書あり。之は更に外護の素木の箱を伴つてゐるが、その側面に貼紙があり「葦曳繪 五卷、詞書世尊寺定成卿、繪飛彈守惟久、外箱光廣卿」とある。

(註六) 但し繪は紙繼の間に接續の不確實の箇所相當にあり、確かに錯簡と覺しきもの一二あり。今詳しくしるさず。

(註七) 室町時代小説集所收のものによるに、同本の段落の切方は小林家本と一致し對校するに辭句の差異は甚だ僅少である。

猶同本缺文の箇所は左の如く補ひ得る。

(同書第一七四頁闕文)

いかにこたへ侍へき心地し「もせて是も東塔へとそいひけるとかくかたりて西谷の中へも入ぬれば是は彌勒堂かれは千手院なと此童をしふれば心の月の影うつる關伽井の水もなつかしく三會の曉も契なる慈尊の櫛もたのもしくてはしたゝすみやすらひける程に童は南谷へとなむ云て別にけりさて何の房ともしらは誰と尋へき様もなく思ひわつらひつゝ、道にまかせて行ける程に侍従も年比は荊揚往復して竹筒の塵をはらひ巻舒鑽仰して松窓の螢をこそひろひしにひきかへて今は修學もすたれ佳山も」物うくて

(同書第一八二頁「以下闕文アルカ」ノ部分)

た、我かもこのせむにて

(同書第一九五頁闕字)

一週忌まではとかくおもふはかりに「て過にけり一廻の佛事なともはてにければ

やかて日吉の社へ參詣して宮めぐりなとしける冥機のもよほすゆへにやありけむ
ことさら信心もおこりておほゆれは十禪師の拜殿に通夜して終夜觀法をこらし
法施にそ備ける社壇の氣色常よりも神さひて隨喜の涙おさへかたしをひえの山の
嶺の嵐は上求菩提の聲をそへ芝田樂の庭のつゝみは下化衆生の誓をあらはす和光
垂跡の方便けにくたのもしくおほゆるまゝには猿のさけひ庭火のかけいづれこ
そ發心修行のたよりならずとみゆる物なしあか月の懺法はてぬれは通夜の大衆面
々に山へのほらむといそきけれどもこれは思ひしたゝめぬる事なれば大原のおく
來迎院のかたはらに年來聞及てたうとき止觀のひしりのありけるをたつねて寂而
房といふ房號をつけてすみそめのすかたにそなりにける」